

伝文

日本口承文芸学会 会報
第 54 号 2014 年 3 月 発行

日本口承文芸学会

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘 1-25

白百合女子大学 間宮史子研究室

Tel 03-3326-5144 (内線207) / FAX 03-3326-1319

E-mail info@ko-sho.org

津波の語りを聞きながら

川島秀一

東日本大震災から3年が過ぎるが、津波の被災者でもある私は、いったい、かの地で何をやってきたのだろうかと思うことがある。三陸沿岸でたまたま出会った方々をつかまえては、倦まず弛まず、「あの日」(2011年3月11日)のことを尋ね、覚えていれば、あるいは伝えられていれば、過去の津波のことも聞いてきた。

岩手県釜石市唐丹町本郷の千葉さよ子さん(昭和16年生まれ)は、母親のナホへさん(明治32年生まれ)から、昭和8年(1933)の三陸津波について何度も教えられていた。幼いころも聞いていたが、母親が老いてから、共に生活するようになり、母が夜中に眠られないときなどに、津波の経験談を何度も、傍に敷いた寝床のなかで耳にしてきたという。

昭和8年の3月3日、ナホへさんは当時、子ども4人に7ヶ月ばかりの赤子を抱え、夫とその両親との9人家族で本郷に住んでいた。深夜に大きな揺れがあり、一度外へ逃げてから戻ったが、近所のおばあさんが、津波が来るかどうかを調べるために、つるべ井戸をのぞき「まだまだ水がある」と言ったことで、安心して寝なおした。ところが、「津波だぞーっ!」という一声で、家族はバラバラになって逃げた。彼女は赤子を帯でタスキに背負い、アンバ様が祀られている急な山を、両手で交互に笹を握りながら上へ上へと必死に登った。

途中で後ろから誰かに帯をつかまえられたので、その帯を解いて赤子だけを両手で抱きかかえた。次には草履まで後ろからつかまえられたので、それも脱ぎ捨てた。途中でドーン、ドーンと2度ほど発破をかけたような音の沖鳴りがして、ピカッと何かが光ったので、その一瞬の光の中で後ろを振り向くと、それまで自分の足元から下は多くの者が競って山に登ってきていたはずだったのに、誰もいなくなり、彼女の着物の裾が濡れていたという。津波が彼女の足元の下を、人を巻き込みながら湾の奥へと走っていったのである。

ナホへさんは、この津波で夫と、姑と、そのおばあさんに付き添って逃げた2人の子を亡くしている。自力で逃げた2人の子と、沖へ漁に出ていた舅は助かった。ナホへさんは、その後、津波が来たときは「ウメッコ(梅の木)のあるお墓の下に集まるんだよ」と家族に伝えていたという。昭和35年(1960)のチリ地震津波のときには、さよ子さんは夫と共にワカメの作業をしていたが、買ったばかりだった船外機をリヤカーに積み、ガタガタと音を立てて引っぱりながら港から逃げた。さよ子さんは当初、リヤカーの後ろにいたが、あまりに慌てていたのでリヤカーを押さずに引っ張ってばかりいたという。母親のナホへさんは、サツマイモを入れたザルを背負い、孫娘とともに、すでにウメッコの下にいた。

ナホへさんは「海のそばに住む人は、これからも津波から逃げられねえ」と語っていたというが、津波との向き合いかたを確実に伝えていた。このような津波の語りを聞いていると、三陸沿岸に住む人々の特異な生活文化が見えてくる。海からの恵みと災いをメリハリのあるかたちで受け入れてきた、この地域の人々の心意を、これからも記録し続けたい。(宮城県)

2013年10月19日、白百合女子大学にて今年度秋季例会が開催された。「『杵物語』をめぐって」というテーマについて三人のパネリストによる報告の後、活発な質疑応答が行われた。

まず昨年1月にモンゴルの杵物語集である『シッディ・クール』の新訳（色音・陳崗龍氏訳）を出版された西脇隆夫氏が、『シッディ・クール』の諸本と内容について紹介された。インドの『屍鬼二十五話』に起源をもつ『シッディ・クール』の邦訳は、戦前に出版された重訳が二種類あるだけだった。今回の新訳はモンゴル語からの直訳で、東アジアの説話の比較研究においてこの翻訳の持つ意味は大きいものである。

次に欧州から西アジアにかけて広がる『シンドバード物語』について、ギリシア語・ラテン語・アラビア語・ペルシア語からトルコ語に至る多言語を駆使して探求されてきた西村正身氏が、その諸本の異同を詳細に説明された。

最後に登壇された小島瓊禮氏は、早くから比較昔話研究における『シッディ・クール』の重要性を指摘し、物語が東になって流布する「昔話の東」という考え方の意義を提唱されてこられた。小島氏は「日本の継子譚の形成を考えるー東で伝わる昔話群からー」という題で東アジアに広く展開する継子話について論じられ、最後に「昔話の史料学」として、類話を集めてその変化を見る中で、昔話の東としての動きが見えてくれば昔話研究に大輪の花を咲かせることができると結ばれた。

巨視的な目で昔話の伝播を眺めわたしてみると、物語のタイプによっては言語や民族の壁を越えて広い地域にわたって流布しているものがある。なぜある種の昔話は遠くに運ばれ、他の昔話はそうではないのか。その事情は必ずしも明らかにされたとは言いがたい。もし昔話がいくつかの東となって動いていたとするなら、その背後に物語を束ねる「杵物語」という形式の力を無視するわけにはいかないであろう。少なくともそれは、超広域にわたる昔話の一致という問題を解く一つの鍵になることは間違いない。その意味でユーラシア大陸の東西に展開する二つの杵物語集を対比し、さらに「杵物語」の意義を考えてみようとする今回の試みは、昔話の世界史を解明する上でまことに意義深い機会であった。

今回の研究会では時間の制約もあって個々の問題を掘り下げることはできなかったが、いくつかの興味深い点も指摘された。西の『シンドバード物語』と東の『シッディ・クール』を対比してみると、両者に共通する物語としてATU653「名人四兄弟」がある。西村氏によればこの話はインドに起源し、少なくとも3、4世紀にまで遡るのではないかという。これを承けて会場からは、インドからペルシア、さらにアラビアから東西へという伝播経路が考

えられるのではないかと、という意見もあった。今後さまざまな杵物語集の研究が進めば、ユーラシアにおける昔話の「海流図」を描き出すことも可能になるかもしれない。そのようなことを夢に描くことができた研究例会であった。

会場には日本の昔話のみならず、中国、インド、ロシア、ドイツ、イギリス昔話の研究者が集まり、国際的に展開する昔話がなぜ目に一丁字もない日本の話者のあいだに伝わるのかという疑問、あるいは杵物語の起源、口承伝承と書承伝承との関係などの質問や意見が相次ぎ、予定の刻限を大きく過ぎての閉会となった。(奈良県)

特集 現在の語りの一側面

大人が学ぶ昔語り

米屋 陽一

2011年3月11日に発生した東日本大震災から3年という時間が過ぎた。「3・11」以降、不思議な現象が起きている。それは大震災を「忘れない」「忘れてはならない」という声と重なりあいながら、被災地・被災者の「語り」は、じわりと広まりと深まりをみせている。命をつないだ被災者たちは、死者や行方不明者たちの声、言葉、姿を甦らせている。その声の力、言葉の力、語りの力は、第三者にも届いて共鳴し合っている。この感動を実感したり伝え聞いたりした大人たちは、伝統的な伝承の語りの力、民話の力に一樣に目を向け始めている。

大震災の翌年の2月、月刊誌『男の隠れ家』の別冊「時空旅人」(隔月刊)編集部から依頼があり、「神話」にからめた「民話」のインタビューに答えた。4月初め、『神話彷徨』が刊行された。編集過程で災害伝承、負の遺産の継承、「3・11」被災体験の「新たな語り」の発信などに触れてきた。「神話」「民話」「災害伝承」「負の遺産の継承」をからめた講演・講座の依頼が複数箇所からあった。

この間に前掲の編集部から、おもしろい内容であったので今度は「大人の民話」を特集したい旨の連絡があった。編集部には大雑把な企画を話し、これまでに古書店、古書展、古美術店で購入した明治・大正・昭和(戦前・戦中・戦後)の昔話の再話本、絵本、廉価の赤本、折り本、チリメン本、奈良絵、錦絵、大津絵、鳥羽絵、掛け軸など、ダンボール箱数箱を用意して手渡した。9月末、『大人が読みたい昔話』(監修=米屋陽一・協力=日本民話の会/三栄書房)が数万部刊行され、全国の書店・コンビニに並んだ。短期間で売り切れた。判型をひと回り小さくし、「時空旅人」ベストシリーズの一冊として12月末に数万部再刊された。

2013年10月、『続 大人が読みたい昔話』（監修などは前掲）が数万部刊行された。

この本の刊行後、講演・講座の依頼が多々あり、反響の大きさに驚いた。「大人が知りたい昔話」（名古屋・栄 中日文化センター／全6回）、「大人が楽しむ昔話」（船橋市・宮本公民館／全4回）、「昔話は生きている」（小平市・中央公民館／全5回）、「昔話の魅力」（福生市・福生公民館松林分館／全4回）などが関わった講座である。

☆講座での「なぞかけ」の場面

「なぞなぞ、なあに」（筆者）→「なつきりぼうちょう、な一ぎなた」（市民）／「そのさき、なあに」→「納戸のかけ金ははずすがだいじ」／「そのさき、なあに」→「菜のついたかぶら」／「あれ、なあに」→「あんどん」／「これ、なあに」→「こんにやく」／「それ、なあに」→「そろばん」。…

☆講座での「むかし語り」の場面＝新潟県長岡・栃尾地方

「むかし、あったてんがのう」（筆者）→「サアンスケ（相槌）」（市民）／「じさとばさがあったてんがのう」→「サアンスケ」／「じさ、山に、柴かりにいったてんがのう」→「サアンスケ」／「ばさ、川に、洗濯にいったてんがのう」→「サアンスケ」…

老若（中年）男女の30～40名は、声をそろえて相槌を打ち、童顔にもどって語りの場を楽しんでいた。「むかし語り」の世界を実感した瞬間であった。

現在、『新しい日本の語り』（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期各5巻／悠書館）シリーズが刊行されており、私も編集委員の一人としてお手伝いしている。「新しい語り」「新しい語り手」「新しい語りの場」を求めて、多くの市民は「民話とはなにか」「昔語りとはなにか」を真摯に学ぼうとしている。（千葉県）

「語り手養成」の今

大島 廣志

かつて日本口承文芸学会では、口承文芸は消滅するかということについて議論したことがある。それは故大林太良氏の「口承文芸の時代はすでに終わったか、あるいは終わりつつある」（『口承文芸研究』20号）が発端であった。それに対して川田順造氏が「もし消滅したものがあるとすれば、それは研究者が『伝統的』に求めていたものが消滅したとみるべきなのだろう」（同24号）と述べ、さらに大島が「昔話の継承の問題は総論から各論へ進むのが今後の課題」（同26号）と続けた。

それから15年以上を経た今日、伝承の語り手の高齢化はますます進んでいる。宮城県栗原市のすぐれた語り手、佐藤玲子さんは今年1月に亡くなった。伝承の語り手の存在が風前の灯であることは疑うことのできない事実である。

一方、昔話の語りを継承しようという機運は以前にも増して高まり、「語り手養成」という形で全国的に展開されている。ここでは私の関わっている「語り手養成」講座の2例を紹介しよう。

東京家政大学公開講座「ふるさとの言葉の魅力と楽しさー方言で語ろうー」(全12回・定員15名)では、昔話を方言で語るにはどのようにしたらよいかを指導している。参加者は自分が語りたい昔話を資料から選び、自分の使える方言に直してテキストを作って、それをくり返し語り、「修了おはなし会」で語るというもので、8年間続いている。テキスト作りについては私が、語り方については、昔話の語り手、君川みち子氏が担当している。

「NPO法人語り手たちの会」では毎年基礎講座(全12回・定員20名)を開講している。これから語り手を目指す人のための講座で、語りの歴史、児童に語る、大人に語る、伝承の語り、語り口研究などについて、私を含めた多数の講師が講義をし、実践の仕方を指導している。

山梨県甲州市には藤巻愛子氏が指導する「山梨むかしがたりの会」がある。山梨の昔話を山梨の方言で語りたいという人を集め、藤巻氏の再話した『山梨のむかし話と伝説』を語りのテキストとし、藤巻氏が語り方を教えている。会員は50名。栃木県足利市には山本俱子氏が指導する足利語りの会「おはなしコロリン」がある。会員たちは昔話を再話し、何度も何度も語りながらテキストを整え、昨年秋に『民話の世界へー語り手による語りのための再話集』を刊行した。会員は20名。

岡山県では立石憲利氏が「語りの学校」を続け、山形県南陽市では「夕鶴の里」が昔話の語り手を養成している。東京の世田谷区、町田市、国分寺市では「語りのボランティア養成講座」を実施した。それぞれの語り手養成方法は同一ではないが、昔話とは何かに始まって、具体的な語りの実践方法の指導という道筋には変りはない。“何を語るか”“どう語るか”が「語り手養成」のポイントとなっている。こうして語りを学んだ人たちは語りのボランティアとして、地域の保育園・幼稚園・小学校・図書館・老人施設において昔話を語っている。

「語り手養成」の一部を紹介したが、「語りの養成」には大別して2つの系統がある。1つは資料をそのまま一字一句違わずに覚えて語る系統と、語り手の個性に合わせて資料を自分なりに書き換えて自分の話を作って語るという系統である。前者は、図書館員たちの語るおはなし会に顕著にみられ、共通語で外国の話を語ることが多い。後者は、日本の昔話や地域の昔話・伝説に関心を持つ人々の活動に多く、方言で語る傾向がある。

今後、この2つの「語り手養成」の系統は日本の中で併存していくのではないかと思われる。

(東京都)

事務局便り

○事務局のメールアドレスが変更になりました。

新メールアドレスは以下の通りです。お間違いのないようお願いいたします。

E-mail: info@ko-sho.org

○会員の異動（敬称略）

《新入会》片岡輝（東京）・渡部豊子（山形）・原田遼（栃木）・清海節子（埼玉）

《退会》 森谷理紗（神奈川）

《物故》 倉田隆延（東京）

○寄贈書籍

・神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第46巻4・5・6・7・8・9号 2013年7月～12月

・『国立歴史民族博物館年報9（2012年度）』2013年9月

・『国立歴史民俗博物館研究報告』第179・182集 2013年11月・2014年1月

・日本民俗学会『日本民俗学』第276号 2013年11月

・中山一郎ほか編『イタコ中村タケ』イタコ中村タケを記録する会 2013年11月

○日本口承文芸学会事務局

〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25

白百合女子大学 間宮史子研究室

Tel: 03-3326-5144（内線207）

Fax: 03-3326-1319（児童文化研究センター）

E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP（<http://ko-sho.org/>）から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。入会金1000円、年会費4000円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。